

疾走する逸民

——郭璞「江賦」の敘法——

佐 竹 保 子

鳴門教育大學

一 はじめに

「游仙詩」の詩人である晉の郭璞（二七六—三三四）には、李善注『文選』卷二二に收められる「江賦」という大作がある。^①「江賦」は、六朝の賦の主流となる六字句と、西漢

の枚乗（？紀元前一四〇）・司馬相如（紀元前一七九—同一一七）以来のオノマトペや物名を羅列する四字句とを組み合わせている。四字句に載せられるオノマトペの羅列には、おそらく書き手の、文字學者としての知識が生きている。

また、魚介類や水中の奇怪な動物たち、水草や礦物や鳥類や岸邊の動植物の描出には、『山海經』や『爾雅』の注釋

者だった書き手の面目が窺われる。「江賦」は、書き手の素質や修養によって、枚乗・司馬相如以来の傳統を最大限に生かし得た、川や海の賦における、唐以前の最後の大賦と言えるだろう。^②

だが「江賦」の特質はそれだけではない。水鳥や水草の描出では、それまでの川や海の賦の描かなかった情景を切り取って、形似描寫を行っている。また、川を敘述した從來の賦のいくつかが、周縁から中心へと筆を進め、中央政權の贊美に落ち着くのに對して、「江賦」は最終部分に、中心から周縁に疾走する「舟子」「涉人」や、周縁に「傲として自足」する「蘆人」「漁子」を描き、彼らを贊美している。

「江賦」はつまり、枚乗・司馬相如以来の漢賦の敘法に、晉六朝の新しい描寫法や發想を織り込んでいる。あたかもキメイラのような、また『山海經』中山經に出てくる人身龍首の「計蒙」のようなテキストなのである。

小論は、「江賦」を、これに先行する川や海を敘した賦、およびこれにやや遅れる賦群と比較し、如上のことがらの

確認を行う。

「江賦」は、現存する中で初めて長江を主題とした賦である。「江賦」以前の川の賦は、蔡邕「漢津賦」・王粲「浮淮賦」・應瑒「靈河賦」・曹丕「濟川賦」「浮淮賦」・成公綏「大河賦」など漢水や淮水や黄河を歌っており、東晉中期に至ってようやく庾闡や曹毗の「涉江賦」が現れる。現存する賦群に見る限り、「江賦」は主題の面でも先驅的な位置にあるわけだが、これを先行する賦と比較するに際しては、主題の異なる賦をも比較対象に選ばざるを得ない。だが、小論の目的は波濤や水流や水中の動植物の描き方、さらには河川の價值付け方の差異を見ることにある。いかなる川を対象としているかは大きな問題にならないと考える。比較の対象にはさらに、漢以來の畋獵や都城の賦の、川や海を敘述した部分も加える。これらは多くが『文選』に選ばれ、その筆力の雄渾さが敘述の隅々にまで及んでおり、比較対象として不足がない。とりわけ左思「吳都賦」の長江の敘述は、素材やモチーフに「江賦」と重なり合う部分が多い。しかしなお存する差異が、「江賦」の敘法の個性

を際立たせている。

小論は、こうした賦群の中での「江賦」の敘法の位置を考察する試みである。

二 經路の敘述——廣大な空間の旅——

長篇大作である「江賦」は、冒頭に

咨五才之併用、ああ五行がともに用いられる中でも

寔水德之靈長。水の德こそ靈妙ですべての頂點に

と水の德を贊美した後、「江」の經路を四四句に涉つて辿る。この部分で中核となるのは、右に示したような六字句であり、四字句は一四句、全體の三割以下に止まる。經路を説明する必要上、情報量が少なく停滯しがちな四字句が避けられた結果であろう。

さて「江」は、「岷山」に發し「洛」水と「涿」水を源とし、「巴」郡・「梁」州・「巫峽」を通り、「漢」水・「泗」水・「淮」水・「湘」水・「沅」水・「澧」水・「沮」水・「漳」水を合わせ、「潯陽」で流れを分かち、廣陵縣の「赤岸」に打ち寄せ、「餘波」を「柴桑」に届かせつつ、「江

都」や「五湖」に注ぎ込む。「峨嵋」山・「玉壘」山・「衡山」・「霍」山・「巫」山・「廬」山を標識として、はるか渤海の東の「大壑」や東海の南の「沃焦」島まで流れ行く。

現存する川を敘した賦で、経路をかくも詳述したものは見当たらない。揚雄「蜀都賦」、張衡「南都賦」に敘される川の描出で経路の占める部分はそれぞれ一句と三句である。もとよりこれらは都城の賦で、川はモティフの一部である。長江のみを對象とする「江賦」とでは、おのずと敘述の多寡に差が生じざるを得ないかもしれない。そこで川を主題とする漢末の蔡邕「漢津賦」、應瑒「靈河賦」、西晉の成公綏「大河賦」を見れば、そこではそれぞれ一〇句、一〇句、二〇句である。東晉の庾闡「涉江賦」、曹毗「涉江賦」に至ると、川全体の経路ではなく、自らが経た部分の敘述となり、四句と二句に止まる。ただし「漢津賦」以下は類書に收められ、全貌が残っているわけではない。「文選」所收の「海賦」や「江賦」も原文のままである保証はないが、それでも残存の程度が異なる可能性は高い。しかしその點を考慮してもなお、「漢津賦」以下の敘述が

「江賦」の半分以下であることは留意されているが、「江賦」それらの描き方もおおむね淡々としているが、「江賦」は、最初から流れの激しさとスケールの大きさを前面に出す。たとえば七句目からの「巫峽」を過ぎたあたりの敘述では、「迅激」「起漲」「泓量を極め」「滔天を狀り」と形容される。

衝巫峽以迅激、 巫峽に突き當たつて速まり急きあい
躋江津而起漲。 江津におしよせて波を起こし

極泓量而海運、 水量を極めて海のようにうねり
狀滔天以淼茫。 天までみなぎり廣々と果てしない

東の太湖に注ぐ二三句目以降では、「華」と「裔」とを區切り、「天地の嶮介」を「壯」とするもの、とされる。

注五湖以漫漭、 太湖に流れ込んで漫々と

灌三江而瀚沛。 三江に注いでざぶんざぶんと

瀉汗六州之域、 六州の地域に廣がり

經營炎景之外。 南方の太陽の外にまで往來する

所以作限於華裔、 だから華土と夷土に區切りを設け
壯天地之嶮介。 天地の險しさをいや増すもの

經路を敘する段落の終わりで、「江」は「風」「雷」「虹」「霄」を産み出し、先述のように「大壑」や「沃焦」にまで流れ込む。

流風蒸雷、

風を流し雷を蒸らし

騰虹揚霄、

虹を馳せ雲を上げる

出信陽而長邁、

信陽から出てはるかに進み

淙大壑與沃焦。

大壑の谷と沃焦の山に流れる

「大壑」は、李善注の引く「列子」に「渤海の東、幾萬億里かを知らず、大壑無底の谷有り、其の下に底無し」、「沃焦」は、同じく「玄中記」に「天下の大なる者は東海の沃焦なり。水の之に灌ぎて已まず」とあり、さらに「山名なり。東海の南方三萬里に在り」と説明されている。いずれも、大海の果てにある、常人の想像を超えた空間である。

これに對し、たとえば張衡「南都賦」での流れの經路は、「爾れ其の川瀆は、則ち滄・澧・灤・澧、源を巖穴に發す」と簡単に片づけられる。蔡邕の「漢津賦」では少々長くなり一〇句を費やすが、動詞の使い方一つを取っても「引」「納」「兼」「總」「演」「遇」「旋」と、「江賦」の

「激」「漲」「極」「壯」「騰」「揚」に較べてはるかにおとなしい。「江賦」について經路の敘述の長い成公綏「大河賦」でも、嚴密に經路を敘したといえるのは、始めの部分の「崑崙の峻極を發し、積石の嵯峨たるを出づ」以下六句に止まる。その中で「砥柱を凌ぎて湍を激し、洛汭を踰えて波を揚ぐ」の前の句がやや水流の勢いを感じさせる程度だ。「大河賦」の敘述はこののち、經路の空間を錯綜させつつ、川に纏わる歴史事象を連ね、空間の旅を時間の旅に置き換えていく。

貫中夏之畿甸兮、中原の都の區域を貫き

經朔狄之遐荒。北方のえびすの果ての地に至る

歷二周之北境兮、二つの周の北の國境を経て

流三晉之南鄉。三つの晉の南の村里を流れる

秦自西而啓壤兮、秦は（この）西から領土を開き

齊據東而畫壇。齊は（この）東に據り國境を定めた

殷徒涉而求固、殷は（これを）涉って堅固さを求め

衛遷濟而遂強。衛は（ここから）遷都し強くなった

趙決流而却魏、趙は（この）堤を切って魏を退け

嬴引溝而滅梁。秦は（ここから）溝を引いて梁を滅

ぼした

歴史とは人爲である。歴史事象の記述は人爲への關心を表し、人爲による川の權威づけにも連なる。だが「江賦」には、こうした歴史的な時間の旅がほとんどあらわれず、空間の描寫に終始する。これは、第六章に述べる、「江賦」における人爲の排除の傾向とも合致することに、注目しておきたい。

三 波濤の敘述

東海の「大壑」や「沃焦」にまで説き至った後、「江賦」は再び「巴東の峽」に戻る。「若し乃ち巴東の峽は、夏后の疏鑿す。絶岸 萬丈、緞駁を壁立す」。戻ったのは、「絶岸」に打ち寄せる波濤の勢いを描くためである。

波濤の敘述は、總計四四句にわたる。ただし、四四句が直線的に續くのではない。前半三〇句のち、間に「曾潭の府、靈湖の淵」の靜かなゆらめきを描く一六句を挟んで、再び波濤を描く後半一四句が配される。これは現實の長江

疾走する逸民（佐竹）

が、「巴東の峽」のち、荊楚の湖沼地帯を経て、沿海地域へと至ることを表現しよう。同時に敘述の上では、中間に靜謐な一六句を挟むことにより、前後の波濤の激しさがいつそう際だつ効果がもたらされている。

この部分は、先の経路の敘述よりも四字句が多い。前半三〇句のうちの二〇句（67%）、中間一六句のうちの一二句（75%）、後半一四句のうちの八句（57%）を四字句が占める。波の状態や音を表すオノマトペが、多いためである。四字句は、六字以上の句より情報量が少ないから、必然的に句数が増える。オノマトペを中心とするこれら四字句の集積が、波濤の壓倒的な勢いや、湖沼の深いたゆたいを、読み手に印象づけるのに役立つている。

とはいえ、「江賦」の波濤の敘述が、先行作品を完全に凌駕しているとは斷言しがたい。西漢初期の枚乗の作とされる「七發」（『文選』卷三四）に、すでに波濤の見事な描出が存するからだ。「七發」は、「楚太子」と「吳客」の問答から成る。「吳客」が「玉體不安」の「楚太子」の氣を引き立てようと、七つの素晴らしいもので誘いをかける。

六つ目のテーマが「觀濤」である。「觀濤」の敘述は一〇〇句以上にわたり、ここにすべてを挙げがたいが、以下の部分的な引用でその片鱗を察せられたい。

所擢拔者。

高くぬきんで

所揚汨者。

揚がり亂れるさま

所溫汾者、所滌汙者。渦卷き、迫るさま

雖有心略辭給、

智力と言葉が十分でも

固未能縷形其所由然也、その様子は言い盡くせません

怳兮忽兮。聊兮慄兮。ぼおっとして、恐ろしくて

混汨汨兮。

ぐちゃぐちゃに亂れます

忽兮慌兮。俶兮儻兮。たちまち變わり、奔放不羈で

浩瀟瀟兮。慌曠曠兮。たつぷりと、ひろびろとして

……

……

其始起也、洪淋淋焉、初めは、とうとうと下り

若白鷺之下翔。

白鷺が舞い降りるよう

其少進也、浩浩沚沚、やや進めば、廣々と白く

如素車白馬帷蓋之張。白馬の白い車が幌を張るよう

其波涌而雲亂、

波が涌き雲のように亂れると

擾擾焉、

騒がしげに

如三軍之騰裝。

全軍が武裝し出發するよう

其旁作而奔起也、

傍らから波立つと

飄飄焉、

ひるがえり

如輕車之勒兵。……

戰車が兵たちを率いるよう……

誠奮厥武、

まことにその威力を奮い

如振如怒。

搖らぐよう怒るよう

沌沌渾渾、

どうどうごうごうと

狀如奔馬。

そのさまは奔馬のよう

「其の始めて起きるや」以下の、白波が起り次第に大きくなっていく描寫に注目したい。「洪淋淋焉として、白鷺の下り翔るが若し」、「浩浩沚沚として、素き車白き馬の帷蓋の張るが如し」、「擾擾焉として、三軍の騰裝するが如し」、「飄飄焉として、輕車の勒兵の如し」という直喩は、白レースのひだのようだった波が、勢いを増して高まっていくさまを表わす。激しい波立ちには、「振うが如く怒るが如し」、「狀は奔馬の如し」、「聲は雷鼓の如し」とも喩えられる。

四字句のオノマトベは、引用の前半部分に集中する。

「恍兮として忽兮たり。聊兮として慄兮たり。混汨汨兮たり。忽兮として慌兮たり。俶兮として儻兮たり。浩瀟瀟兮たり。慌曠曠兮たり」。この四字句の集積が、波のとりとめない恐ろしさ、つかみどころのなさを印象づける。

波濤のもたらす怖さや勢いや美しさを、かくも魅力的に綴ったテキストは、以後も見出しがたい。そもそも邊幅が、現存するものを見る限り、「七發」にはるかに及ばない。

司馬相如「上林賦」や揚雄「蜀都賦」、左思「吳都賦」でも、その波濤の敘述はそれぞれ二四句、二七句、一二句に止まる。張衡の「南都賦」、蔡邕の「漢津賦」、王粲の「游海賦」や「浮淮賦」、曹丕の「濟川賦」や「滄海賦」、應瑒の「靈河賦」、潘岳の「滄海賦」、庾闡の「涉江賦」、曹毗の「涉江賦」などに至っては、いずれも一〇句以下である。比喩やオノマトベの使い方にも、「七發」以上の新味は見られない。例外は木華の「海賦」(『文選』卷二二)で、次のようにある。

狀如天輪膠戾而激轉、天の輪が外れて激しく回るよう

疾走する逸民(佐竹)

又似地軸挺拔而爭迴。地の軸がとび出て競い回るよう

岑嶺飛騰而反覆、嶺みねが飛び上がりくつがえり

五嶽鼓舞而相礎、五嶽が舞い上がりぶつかりあう

「天輪」は、李善注所引『呂氏春秋』に「天地は車輪の如し、終われば則ち始まりに復す」、「地軸」も、同引「河圖括地象」に「地下に四柱有り、廣さ十萬里、三千六百の軸有り」とある。規則正しくめぐるはずの「天輪」が、文字通り常軌を逸し、地下に潜むはずの「地軸」が、壊れた椅子のバネのように飛び出して旋回する。天地が崩壊し五嶽が躍り出す。荒れ狂う海の波濤を表すこの凄まじい直喩と暗喩は、「七發」の比喩をも越えている。

「江賦」は「海賦」にやや遅れる。そのためか「江賦」は、波濤の比喩の工夫を「七發」や「海賦」に任せ、ほかの所に手腕を発揮しようとする。それが、さんずい偏の四字句の集積と、湖沼に潜む生命力のうごめきの描出である。前者については、「砢巖鼓作、潮清渠潏(ほんんと岩が鼓打たれ、どんざぶん)」の後の句を皮切りに、さんずいの、しかも他の賦ではおおむね見られない文字ばかりが、八句

三三二字に渡つて隙間なく連ねられる。それ以後もさんずいの文字が斷續的に鏤められ、總計六三字にのぼる。^⑤この波濤の威力で、「厓隙爲之泐嵒、碕嶺爲之崿嶸（岸邊の岩はこのためにがらがらになり、岸の小山はこのためにでこぼこになる）」。

さんずいの連續は「七發」にも見られなかった。「七發」中の四字句オノマトベの部分は、先に挙げたように、波濤の威力を、それ自體の描寫よりもそこに起因する「觀濤者」の恐怖感によつて伝えようとする。だから、さんずいよりもりっしん偏の字が多い結果となる。

司馬相如「上林賦」や揚雄「蜀都賦」、張衡「南都賦」、左思「吳都賦」、木華「海賦」などの大賦の、波濤を描く部分には、さすがにさんずいの字が多いが、「江賦」ほど連續してはいない。

「江賦」以後の六朝の川や海の賦では、そもそも四字句オノマトベの集積で波濤を描出しようとする試み自體が、希薄になる。東晉の庾闡の「涉江賦」や「海賦」、曹毗の「涉江賦」や「觀濤賦」、孫綽の「望海賦」、顧愷之の「觀

濤賦」、伏滔の「望濤賦」、それに蕭齊の張融の「海賦」などでは、六字以上の句が増大する。波濤を表すオノマトベの四字句は、現存の曹毗賦・顧愷之賦・伏滔賦のように、ほとんど含まれないか、庾闡賦の「巖を排き瀨に拒り、石に觸れ濤を興し、澎湃洗淖として、鬱怒咆哮す」（「涉江賦」）や「瀟瀟潏潏として、天を浮かべ日を沃ぐ」（「海賦」）のように、事柄を敘す四字句の間に控えめに差し挟まれる。張融「海賦」は、比較的四字句の多い復古的な印象の大作だが、「潏澤渚洽として、來往し相い撃ち、汨湫澍渤として、石を牽し窟を成す」と、オノマトベの配置については東晉の賦に似る。

すでに西晉の木華「海賦」において、先に挙げたように、四字句のオノマトベではなく七字句を基調とした比喩が、先行テクストの修辭を乗り越えるよすがとなっていた。「海賦」のあとに出現した「江賦」の四字句オノマトベの部分は、その意味では流れへの逆行だった。「江賦」は、漢の大賦の敘法を敢えて復活させ、それを極限まで押し詰める。だが「江賦」におけるさんずい偏の四字句の集積は、

あまりに人工的に過ぎて痛々しい感すら誘う。極限まで伸びていった敘法は、太陽に向かって飛ぶイカルスのように、あるいは紺碧を突き刺すピラミッドの頂點のように、そのまま天空に消え、後繼者を見出せない。とはいえ「江賦」の試みは、中國の言語の可能性を、實際の文學作品で突き詰めた一つの典型として評價しうるだろう。

四 淵のうごめき

波濤の勢いを敘す三〇句と一四句に挟まれて、「江賦」には、「靈湖の淵」の静けさや廣大さ、水面の霧を描く一六句がある。ここでもさんずいの集積が依然試みられ、さんずいや「水」を含む字が三四字連ねられている。

流れのためたいや淵の廣大さは、司馬相如「上林賦」や張衡「南都賦」にも、次のようにある。「悠遠として長懷す。寂寥として聲無く、肆に永く歸す。然る後瀨漑潢漾として、安らかに翔り徐ろに徊り、翫乎瀟瀟として、東に太湖に注ぎ、衍り陂池に溢る」。「其の陂澤に於いては則ち鉗盧・玉池・楮陽・東陂有り。貯水渟渟として、亘望するも

疾走する逸民（佐竹）

涯無し」。西晉の應貞「臨丹賦」に至ると、流れのためたいは、いっそう清らかな静謐として顯現する。

別流分注、 流れを分かつて注げば

冰瑩玉靜、 冰のきらめきと玉の静けさ

清波引鏡、 清い波は鏡を誘い

形無遁影、 形に逃れられる影はない

いっぽう、水面に湧く霧については、西晉の成公綏「大河賦」の斷片が「氣蓬勃として以て霧蒸る」と敘し、左思「吳都賦」も、水面の果てしなさをも含めて一〇句にわたって描き出している。

「江賦」の新味は、これら先行するテキストで分裂していた、流れのためたいと霧の描寫とを一つに結びつけ、その双方にエネルギーなうごめきを賦與した點にある。

若乃曾潭之府、たとえば深い淵の奥底

靈湖之淵、 神聖な湖の深みは

澄澹汪洸、 ひっそり澄んでゆらめき

潢滉困沚、 深々と廣々と

泓沚澗瀑、 ぐるぐるめぐり

渚鄰圖潏。

ぐるぐるめぐる

混潏瀾渙、

清く深く

流映揚焔。

流れる光を映し揚げ

溟潏渺涵、

渺々とはてしなく

汗汗汩汩。

はるばるとどこまでも

察之無象、

見つめても形はなく

尋之無邊。

尋ねてもはてはない

氣滃渤以霧香、

大氣はもうもうと霧の薄暗さ

時鬱律其如煙。

時には鬱勃と煙のよう

類胚渾之未凝、

胎兒がまだ固まらないよう

象太極之構天。

太極が天を作るよう

「江賦」の「淵」の水は、「泓泓澗澗、渚鄰圖潏」と旋

回する。司馬相如「上林賦」の「安らかに翔り徐ろに徊

る」が、さんずいのオノマトペに言い換えられており、異

様な文字の集積がエネルギーの渦巻きを伝える。より時代

の近い應貞「臨丹賦」の、先の一節と較べてみてもよい。

水のたゆたいを、「冰」「玉」「鏡」に喩えた「臨丹賦」の

靜謐美とは、まったく異質である。

霧については、左思「吳都賦」の「歔霧濛濛として、雲

蒸し昏昧たり」を、「江賦」は「氣滃渤として以て霧香く、

時に鬱律として其れ煙の如し」と敷衍し、さらに「胚渾の

未だ凝らざるに類し、太極の天を構えるに象る」と付け加

える。

この最後の二句で、霧に煙る「靈湖の淵」が、天地を産

み出す「易」の「太極」に重なる。無邊の水面に廣がる

「霧」の「滃渤」「鬱律」は、「太極」の産みの力動だ。一

見「澄澹汪沔」の「淵」だが、中では水が深く渦巻き、表

では「氣」が盛んにうごめく。萬物を産み出す混沌である。

最後の二句は、冒頭の水路の敘述を含む激しくスケールの

大きな語彙や、續く波濤の敘述にひしめくさんずいの字の

集積と響き合い、「江賦」全體に、鬱勃たる精氣を漲らせる。

漢の大賦にも通ずる精氣である。この精氣は、次の物

盡くしの段落においても、衰えることがない。

五 物盡くし——豊富さと奇怪さ——

「江賦」は以下、大賦特有の物盡くしの一段に入る。列

舉される物は、魚・「水物」・川の水草・鑛物・鳥・岸邊の動植物・湖沼の植物などである。「水物」の段落は一度換韻し、前半に貝やクラゲなどの一般的な水生動物が、「若し乃ち」で始まる後半には、「一角」の「龍鯉」、「九頭」の「奇鵠」、「三足」の「鼈」、「六眸」の「龜」、「鮫人」などの奇怪な生き物が連ねられる。

この部分も、物名の羅列という性質上四字句が多い。物名の羅列と鋪陳をこととする漢の大賦同様に。四字句を基調とする句は、魚の段落では一六句中二二句（75%）、「水物」の前半では一九句中一三句（68%）、後半では一二句中四句（33%）、水草の段落では八句中四句（50%）、鑛物の段落では一〇句中八句（80%）、鳥の段落では一五句中一五句（100%）、岸邊の動植物の段落では二〇句中八句（40%）、湖沼の植物の段落では一八句中一二句（67%）を占める。

中で、「水物」の後半と、岸邊の動植物の段落に四字句が少ない。これはどちらも、読み手に耳慣れない珍しい「物」を列挙していることに關わる。「物」のイメージを

読み手に伝えるには、一つ一つの「物」に對する情報量を他の部分より増やさざるを得ない。そのため一句で一物を表すには、必然的に四字句に餘るのである。たとえば、鳴き聲が樂器の「磬」の音に似て珠玉を生むという「文魮」は、「文魮は磬のごとく鳴き以て璆を孕む」（「水物」の段）、魚なのに人面人手の「鮫」や牛に似た姿で陸に住むという「鯉」は、「鮫鯉は垠隙に降跼す」（岸邊の動植物の段）と、説明的に表現される。

四字句による物盡くしには、司馬相如以來の漢賦から左思「三都賦」に至るまで、長い傳統がある。それらを繼承しつつ乗り越えるのは、容易な技ではない。だが「江賦」は、第一には列挙する「物」の豊富さで、第二にはそれらの珍奇さで、先行の大作を凌駕しようとする。^⑦

たとえば司馬相如「上林賦」は、前章に挙げた「東に太湖に注ぎ、衍り陂池に溢る」に續いて「是に於いてか蛟龍・赤螭」と水に棲む物たちを列挙し始め、その數は一一種類にのぼる。いっぽう「江賦」は、「魚」と「水物」に敘述を分け、前者では一六種類、後者では四二種類を列ね

「江賦」に先立ち、「吳都賦」とほぼ時期を同じくする木華「海賦」は、漢賦以來の物盡くしの敘述を、そもそも放棄したかのように見える。たとえば「魚は則ち横海の鯨、突扨として孤り遊ぶ。巖嶽を翼ち、高濤に偃す」と、魚の段落では、鯨の大きさからその死までを、一四句にわたって描くだけだからだ。潘岳「滄海賦」もこれに似て、「其の魚は則ち吞舟の鯨鯢、鰐鰕・龍鬚有り。蜂目に豺口、狸班に雉驅。怪體・異名は、圖るに勝うべからず」と記す。

東晉の庾闡の「海賦」「涉江賦」「楊都賦」、蕭齊の張融の「海賦」なども、現存のもので見る限り、「吳都賦」の舉例をすら凌駕していない。とくに庾闡「涉江賦」は、「且つ夫れ山川の瑰怪、水物の含靈、鱗は其の族を千にし、羽は其の名を萬にす。毛羣は觀を詭わせ、裸類は形を殊にす」と概括するだけである。曹毗「涉江賦」に至っては、類をなすものを述べる箇所がまったく見當たらなない。漢代の賦家たちをあれほど驅り立てていた物盡くしへの情熱は、東晉になってほとんど失われたかのようだ^⑧。

物盡くしへの情熱が失われゆく時期に、「江賦」は、漢

の大賦以來の努力を極限まで押し進めた。それは、書き手の旺盛な好奇心と壓倒的な博物學の知識が無ければ果たせないことだった。後繼者は容易に出現しがたい。事實、川や海の物盡くしは、四字句のオノマトベの集積と同様、六朝の現存の賦にこれ以後繼承するテクストを見出せない。「江賦」は、物盡くしと四字句オノマトベの敘法の、賦における墓標の一つとなるしかなかったようだ。

六 魚と鳥と水草——清新な情景描寫——

だが「江賦」は、漢以來の敘法の墓標であるに止まらない。以後の六朝賦の敘法の中核となる、細やかで新鮮な情景描寫の方向をも開拓している。ただ、「江賦」の描寫はまだ、六朝賦特有の靜謐さや纖細さには乏しい。むしろ壓倒的な光量と動きで、エネルギーシユな力強さを印象づける。とはいえ、情景を切り取る視角は新しく、觀察する目の細やかさを感じさせる。「江賦」はいわば、細やかさと力強さの融合した、漢以來の大賦にも六朝賦にも見出しがたい、獨特の美しさを呈している。

前章に觸れた「魚」盡くしの一段に、次のような描寫がある。

鱗甲錯錯、鱗が重なり合い

煥爛錦斑。きらきらとりどり

揚鰭掉尾、背ビレをあげ尾ビレを搖らし

噴浪飛颯。波や唾を噴き上げる

排流呼哈、流れを遡りハアハア

隨波遊延。流れに隨いゆうらり

或爆采以晃淵、あるものは彩りをさらして淵を輝かせ

或嚇鰓乎巖間。あるものは岩間に鰓をひらく

初二句のきらびやかさがまず目を引く。「鰭を揚げ尾を掉い」四句の運動量も普通ではない。激しい動きのあまり魚は疲れ果てて「淵」に憩い、あるいは「巖間」に身を横たえる。その休息の姿は「采りを爆し」「淵を晃かせ」、その死骸すら「巖間に嚇く」と、輝かしく美しい。似た表現を探せば、左思「蜀都賦」に「鱗を差え色を次ね、錦質報章あり。濤に躍り瀬に戯れ、中流に相忘る」とある。「江賦」の敘述のきらめきと動きに及ばない。

光の描出を得意とする「江賦」であるから、「金礦丹磧」などの礦物の描寫も期待されるが、意外にも「或いは彩りを輕連に類らし、或いは曜きを崖鄰に焔らす」と、「魚」の描寫の同工異曲に止まる。

だが「鳥」の描寫の新しさは、ほとんど「魚」に匹敵する。漢の司馬相如「上林賦」が「汎淫泛濫して、風に隨い澹淡たり。波と搖蕩し、草渚を掩薄す。菁藻を喙喋し、菱藕を咀嚼す」と敘して以來、水鳥については、波に浮かび藻をついばむ、ゆったりと自足したさまが描かれるのが常だった。張衡「南都賦」に「嚶嚶和鳴し、澹淡と波に隨う」、王粲「游海賦」では「繽紛として往來し、沈み浮き翱翔す」と空をも飛ぶが、曹丕「臨渦賦」には「魚は頡頏し鳥は逶迤とし、雌雄鳴きて聲相和す」、「滄海賦」に「鱗を揚げ翼を濯い、載ち沈み載ち浮く。仰ぎて芳芝を啖み、俛きて清流に漱ぐ」、木華「海賦」にも「羣れ飛び侶に浴し、廣きに戯れ深きに浮く」とある。左思「吳都賦」ですら、「湛淡たる羽儀、波に隨い參差たり、翻を理め翰を整え、容與として自ら翫ぶ。蔓藻を彫啄し、漪瀾に刷盪す」

と、「上林賦」を大きく出ない。

しかし「江賦」は、曹丕賦が「翼を濯い」、左思賦が「漪瀾に刷盪す」と描いたその一瞬をとらえ、さらに敷衍する。

濯翮疏風、羽を洗い風に梳き

鼓翅翮翮、翼を動かしパタパタと

揮弄灑珠、揮えば珠を注ぎ

拊拂瀑沫、拂えばしぶきをあげる

集若霞布、集まれば霞が廣まるよう

散如雲豁、散れば雲が開いたよう

濡れそぼった鳥の羽に、眞珠のような水滴が付いている。

羽を揮えば、それは糸の切れた首飾りさながら、きらめきつつ散らばる。羽ばたけば、しぶきが瀧のように注ぎかかる。水鳥の一瞬のはばたきを切り取り、水滴の激しい動きを二様にとらえ、光との交響を感じさせるテクストを織りなしている。

續く「集れば霞の布くが若く、散れば雲の豁^{くわく}が如し」は、班固「西都賦」の「鳥は則ち……雲集し霧散す」の常

疾走する逸民（佐竹）

套的な比喩を、ほぼ逆用する。鳥の集合は「雲」ではなく「霞布」と表され、彼らの動きの軽やかさやしなやかさが強調される。その解散も「霧」ではなく「雲豁」だ。鳥たちが散ったことで、雲間から太陽が射し込むような、からりと明る印象を与える。^⑨

湖沼の水草の描寫はどうか。「岐に因り渚を成し、澗に觸れ渠を開く。壑に漱ぎ浦を生じ、區別れて湖と作る」と始まる一八句のこの段は、次のように閉じられる。

播匪藝之芒種、散らばるのは植え付けないのぎの種

挺自然之嘉蔬。すらりと伸びるのは自然の良き稻

鱗被菱荷、水面を鱗のように覆う菱とハス

攢布水蘆。集まり布く水草の實

翹莖藻葉、莖をそびやかし花を水浸け

濯穎散裹。穂を洗い實を散らす

隨風猗萎、風のままにそよぎ

與波潭沲。波とともにゆらめき

流光潛映、流れる光が水中に映り

景炎霞火。影は霞の紅よりも燃える

「區別」れたこの一畫は、自然の水田を形作っている。

そこに生えるのは、野生の稻や麥、菱や蓮である。水中からすつと伸びた莖の先の穂は、重く實つて垂れ下がるにつれ、波に濯われる。草たちは風のまま、波のままにしなやかにそよぐ。

水草を描く賦は從來それほど多くない。揚雄「蜀都賦」は「其の淺濕には則ち生ず、蒼葭・蔣蒲、霍芋・青蘋。草葉・蓮藕、菜華・菱根」と、草名を羅列するに止まる。

張衡「南都賦」が「其の陂澤に於いては則ち」と説き起す一段では、水草は「風に従い榮を發き、斐披として芬葩す」と描かれる。このまま陸の草花に轉用できる描寫であり、身の半ばを水に委ねている草たちの特性が生きていない。しかも「南都賦」はこののち「其の水は則ち寶を開き流れを灑ぎ、彼の稻田を浸す。溝澮は脈連し、隄塍は相い結つなる。朝雲 興らずとも、潢潦 獨り臻る。……冬は稔いね夏は穡むじ、時に隨い代よも熟す」と綴る。溝や畦が區畫整理された人工の「稻田」を描き、冬夏に稔りを提供する實際的な效用の贊歌で一段を結ぶのは、「江賦」と對照的で

ある。

左思「蜀都賦」の、「其の沃瀛は則ち」と水草を描く一段は「總莖 柅柅として、裊葉 蓊蓊たり。蕢實の時味は、王公に差めん」である。前二句は「南都賦」同様水草の特性を生かせておらず、後二句には實際的な效用の匂いがする。左思「吳都賦」も、「鬱兮として倏茂し、曄兮として菲菲たり。光色 炫晃し、芬馥として盱矚す」と、やはり陸の草花と選ぶ所のない描寫を配した後、「職貢 其の包匭を納め」と、『尚書』に基づく人間界での效用を付け加えることを忘れない。

これらに對し、「江賦」の水草の段は、人爲の氣配を排す。おのずと生まれた水田に「播ち」るのは「匪藝」の種、「挺」びるのは「自然」の稻だ。そこでの稔りは「穎を濯い裹を散らし」、收穫されずに水底に沈み、翌年再び生長が繰り返される。自然のまま循環する營みであり、それが途中で斷ち切られて「王公に差」められることもない。一段は、水面に影を搖らめかせつつ、炎のように燃える花の、妖しいまでの美しさを描いて終わる。あたかも書き手の、

實際的な效用よりもそれ自體の美しさを首位に置く心意氣を示すかのように。

以上見てきたように、「江賦」の物盡くしの段は、從來にない多量の、また珍奇な物の名を擧げるに止まらない。それは斷片的にはあるが、新鮮な形似描出を織り込んでいる。それぞれの物の姿を、清新な視角と細やかな觀察に基づきつつ壓倒的なきらめきの中に描き出そうとしている。^⑩

七 新しい神仙境

物盡くしの段に續き、「江賦」は神仙境の敘述に入る。

その場所の設定が、從來の賦の、海や川の敘述における仙境とは異なっている。

爰有包山洞庭、ここに包山の洞庭

巴陵地道。巴陵の地脈がある

潛達傍通、地下の道が方々に通じ

幽岫窈窕。奥深い洞穴がどこまでも

金精玉英瑱其裏、金精や玉英がその中にきらめき

瑤珠怪石琤其表。瑤玉や眞珠や怪石がその外を彩る

疾走する逸民（佐竹）

驪蚪摎其址、黒い角無し龍がその麓にとぐる巻き
梢雲冠其嶸。吉祥の雲がその頂きに浮かぶ

海童之所巡遊、海童がめぐり遊ぶ所

琴高之所靈矯。琴高が舞い上がる所

冰夷倚浪以傲睨、河の神の冰夷が波に依って睥睨し

江妃含嚬而睇眇。江妃は眉をひそめてみはるかす

撫凌波而鳧躍、高波を抑えて鳧のように飛び上がり

吸翠霞而夭矯。翠の霞を吸って伸びをする

四字句が29%と少ないのは、オノマトベや物名よりも、描寫を中心としているからである。描かれるのは、長江流域の太湖にそびえる包山と、その下に延びる洞穴だ。金や玉に満ち、眞珠や寶玉が散り、ふもとに黒龍が蟠り、頂きに吉祥の雲が浮かび、神仙の海童や琴高や冰夷や江妃が、水面や空中を自在に行き來する。

冒頭には、この地域が「巴陵の地道」で、「潛達 傍らに通じ、幽岫 窈窕」たる所と紹介される。これは、道教のいわゆる洞天福地の條件に當てはまる。末句には「翠霞を吸い夭矯す」とある。おそらく神仙たちの導引術を表し

たものだろう。當時の道教の教義が敘述の中に生かされている。

神仙境は、海を描くテクストにはよく登場する。西の崑崙山に對し、東海には、蓬萊以下の三神山があるからだ。たとえば、現存するもつとも古い海の賦である班彪「覽海賦」は、次のように敘す。「日月を指し以て表と爲し、方(丈)・瀛(州)と壺梁とを索す。金瑇を曜やかせて以て閭と爲し、玉石を次ねて堂と爲す。萸・芝階路に列なり、涌醴中唐を漸す。朱紫彩り爛き、明珠と夜光と。(赤)松・王子喬は東序に坐し、(西)王母は西箱に處る。韓衆と岐伯とに命じ、神篇を講じて靈章を校ぜしむ」。樂府ではあるが曹植「遠遊篇」(「藝文類聚」卷七八)の海の描出にも、大龜の戴く「方丈」の神山が登場する。「遠遊して四海に臨み、俯仰して洪波を觀る。大魚は曲陵の若く、浪を承け相い經過す。靈鼈方丈を戴き、神嶽儼として嵯峨たり。仙人其の隅に翔り、玉女其の阿に戯る」。木華「海賦」も同様だ。「爾れ其の水府の内、極深の庭。則ち崇島・巨鼈の、崕峴として孤亭する有り。洪波を壁き、

太清を指す。磐石を竭くし、百靈を栖まわす」。

左思「吳都賦」の仙境には、「江賦」と同じ「江婁(江妃)」「海童」が登場する。「江婁是に於いて往來し、海童是に於いて宴語す」。だが、彼らの舞臺は「島嶼縣邈として、洲渚馮隆」たる所である。劉淵林はこれに「島は海中の山なり。嶼は海中の洲なり」と注を付す。つまり「吳都賦」の仙境とは、從來通りの東海の神山にほかならない。

いっぽう、司馬相如「上林賦」以降の賦で川を敘した部分や、蔡邕「漢津賦」・王粲「浮淮賦」・曹丕「濟川賦」・應瑒「靈河賦」以來の川の賦に、仙境は表れない。「靈河賦」「大河賦」などは、崑崙の仙境を描こうと思えば描けるトポスを備えているにもかかわらず。「江賦」が仙境を敘述するのは、川の賦の中では珍しい。

だが「江賦」は、海の賦でも、沿海の都城の賦でもない。長江を描くという敘述の統一性を期すならば、そこに左思「吳都賦」のように東海の神山を紛れ込ませることはできない。そこで「江賦」が描いたのが、「包山洞庭」の洞天

福地だった。「江賦」はその意味で、二重の新しさを備えている。現存する川の賦で始めて仙境描寫を試みたことと、その仙境に洞天福地を選んだこと。「江賦」はかくて、道教の教義が整えられつつあったこの時期にふさわしい、新しい仙境描寫を開拓している。

八 周縁への疾走

仙境描寫ののち、「江賦」にようやく人の營みが登場する。最初は「舟子」「涉人」の操る船團の敘述、次いで「倏忽として數百、千里も俄頃なり」と疾走する早船の敘述、さらに「蘆人」「漁子」の「傲たる自足」のさまが續く。これらの段落では、四字句の割合が全體の半ばを上下し、どちらかと言えば描寫に重きが置かれる。

これまで人間の匂いを徹底して排してきた「江賦」が、なぜここで急に人爲を描くのか。それによって何を表そうというのか。一段ずつ見ていこう。

若乃宇宙澄寂、さて宇宙（時空）は靜寂

八風不翔。 八つの風も興らず

疾走する逸民（佐竹）

舟子於是搦棹、舟人はそこで棹を抑え
涉人於是擗榜。 渡し守はそこで櫂を止める

漂飛雲、（吳國の名船）飛雲丸を浮かべ

運餘艫。 餘艫丸を動かす

舳艫相屬、へさきともが續き

萬里連檣。 萬里も帆柱が連なる

汭洄沿流、 遡ったり下ったりするのは

或漁或商。 漁り人や商人

赴交益、 交州や益州に赴き

投幽浪。 幽州や樂浪郡に至り

竭南極、 南の果てを極め

窮東荒。 東の奥地を窮めようと

「舳艫 相い屬き、萬里 檣を連ぬ」大船團の描寫は、左思「吳都賦」にもある。「飛雲」「餘艫（餘皇）」という往時の名船も、「吳都賦」の一段に登場する。だが描き方が異なる。

「吳都賦」に言う。「弘舸 舳を連ね、巨檻 艫を接す。飛雲・蓋海、制は常模に非ず。華樓を疊ねて島峙し、時に

方壺を髣髴せしむ。鵠首を比べて裕有り、餘皇を往初に邁こゆ。組幃を張り、流蘇を構う。軒幌を開き、水區に鏡る。

槁工・織師、選ぶは閩禺自りす。長風に習御し、靈胥に狎翫すれば。「制は常模に非ず」以下の句で、「華樓」「鵠首」「組幃」「流蘇」と、船の造りの豪華さ・美しさが強調される。「飛雲」「蓋海」「餘皇」も、この文脈では、性能の良さよりむしろ豪華さの記號となる。豪華船たちは帆をいっぱい開き、おのが姿に見惚れるように「水區に鏡る」。船にふさわしく、舵取りも一流の者が選ばれている。かくも贅美を凝らした船たちは、いったい何のために集められたのか。

この一段の前には、「嶮澗は閩からとなり、岡岵は童はげやまとなる」という、陸での大規模な巻き狩りが敘されている。後ろには、「虞機發し、鳩鵠を留む。鉤鉞縦横に、網罟緒を接す」と、漁獵のさまが描かれる。豪華船は「谿壑之が爲めに一えに罄つき、川瀆之が爲めに貧しさに中あたる」（後段）という、貪婪な漁獵のために用意されている。贅澤で貪婪な漁獵は、長江中流域の彭蠡澤で催されている。

上の一段の直前に「舟航を彭蠡に汎べ、萬艘を渾すべて既に同じ」とあるからだ。

翻って「江賦」の「飛雲」「餘艫」の船團は、折しも「宇宙は澄寂、八風翔けず」という天候の時に、「舟子」が「棹を搦え」、「涉人」が「榜を攘め」る状況を克服する意圖で、集められている。船の豪華さの記述は皆無である。「飛雲」「餘艫」は、風でも航行できるそのすぐれた性能が期待されている。「泝洄し沿流する」ために。

「泝洄し沿流する」のは、「漁」人や「商」人である。彼らは「交・益に赴き、幽・浪に投じ、南極を竭くし、東荒を窮」める。「漁」を目的の一つとしていても、「吳都賦」のような王侯の豪奢な漁獵ではない。彼らの空間も、「彭蠡」のような都近くの領地ではない。彼らは、命がけで世界の果てに乗り出していく。

彼らの運動は、「吳都賦」のような中心付近の旋回ではなく、中心から周縁への逸脱である。その逸脱は次の段落で、晴れやかな疾走として表現される。

爾乃

かくて

霜霧被於清旭、
颯五兩之動靜。
長風颭以增扇、
廣莫颭而氣整。
徐而不颭、
疾而不猛。
鼓帆迅越、
赴漲截瀾。
凌波縱施、
電往杳溟。
霧如晨霞孤征、
眇若雲翼絕嶺。
倏忽數百、
千里俄頃。
飛廉無以晞其蹤、
渠黃不能企其景。
穆天子の馬の渠黃も影を追えない
船の疾走の敘述は、「吳都賦」の先の一段の直後に「千里
を寸陰に責め、聊か期に先んじて須臾たり」と付されるは

疾走する逸民（佐竹）

か、木華「海賦」に次のようにある。「若し乃ち偏荒速
かに告げ、王命 急に宣ふれば、飛ぶこと駿く楫を鼓し、
海に汎び山を凌がん。是に於いて勁風を候い、百尺（の
帆柱）を掲ぐ。長綯を維ぎ、帆席を挂く。濤を望み遠く決
れ、罔然として鳥のごとく逝く。鷗きこと驚鳧の侶を失う
が如く、倏かなること六龍の掣く所の如し。一たび越ゆれ
ば三千、終朝ならずして居る所に濟る」。

「海賦」の「罔然として鳥のごとく逝く」疾走は、「王
命」による。中心から周縁への逸脱ではなく、中心の延長
として周縁に及ばされ、周縁を支配し二次的に中心化する
ものだ。疾走の比喩は「驚鳧の侶を失うが如く」と表され
る。不安と焦燥と悲哀に満ちた事態である。あたかも「王
命」を遲滞なく遂行しなければならぬ者の、不安と焦燥
と恐怖を重ねるように。もう一つの比喩も穏やかではない。
「六龍の掣く所」とは太陽を意味するから、それが「倏
か」であるとは、落日の光景を連想させ、推移の悲哀を惹
起する。

これに對し、「江賦」の疾走はどうか。「霧たること晨霞

の孤り征くが如く、眇たること雲翼の嶺を絶するが若し」。蓄微色の朝霞が大空いつぱいに廣がり消えていく。この比喻は晴れやかである。後の句は、『莊子』逍遙游篇の大鵬を踏まえる。「王命」の支配する世界をも相對化する、スケールの大きい故事である。疾走する船を、「飛廉」も追えず、穆天子の馬である「渠黄も企つ能わず」という。

この最後の一句は象徴的だ。世界を巡つてその支配の痕跡を標した傳説の帝王さえ、船の疾走を阻止できない。船は「王命」のない世界へ、自由へと滑り走る。かれは逃げ切ることができるのか。續く一段が、それに答える。

於是蘆人漁子、かくて蘆を採る人や漁り人は

擯落江山。山川に落ち延びる

衣則羽褐、着るのは羽毛

食惟蔬鱸、食べるのは野菜と小魚

杵澱爲沔、淀みに柴を積んでふしづけとし

夾漈羅罫、水合いを挟んで魚籠を並べる

箒灑連鋒、箒や灑のしかけに釣り針を連ね

罾罾比船、罾罾の網を張り舟を並べる

或揮輪於懸磻、險しい崖から釣り糸を揮つたり
或中瀨而橫旋。中瀨で自在に旋回したり

忽忘夕而宵歸、日が暮れるのも忘れて夜に舟を戻し
詠採菱以叩舷。菱とり歌を歌いながら舟ばたを叩く
傲自足於一嘔、満ち足りた思いを一ふしの歌にのせ
尋風波以窮年。風や波のまにまに生涯を終える

「澱に杵し沔と爲し」以下の「蘆人・漁子」の漁を、「吳都賦」の「谿壑 之が爲めに一えに罄き、川瀆 之が爲めに貧しさに中る」という貪婪な欲望に支配された漁に、もう一度較べてみてもいい。また、木華「海賦」の描く「舟人・漁子」の様相と較べてもいい。「海賦」の「舟人・漁子」は「南に徂き東を極め」た結果、「或いは鼃鼃の穴に屑没し、或いは岑嶽の峯に挂罾」して一命を失う。中には、遠く離れた「裸人の國」や「黒齒の邦」に流される者もいて、運良く「歸風に因り以て自ら反^{かへ}」っても、「徒らに怪を觀て多く駭くを識るのみ、乃ち歷し所の近遠をも悟らず」という状態に陥る。人爲の世界や中夏の文化を離れた彼らは、甚だしくは命を失い、そうでない場合も、対象を

九 結びに代えて

認識する理性とそれを愉しむ感性の自由を失う。中心に居る者は、貪婪な欲望に支配されるが、中心から離れた者は、自ら把握できない不條理に支配される。中心から遁走し、しかも「自足を一嘔に傲たる」自由な逸民を描き得たのは、現存する川や海を敍した賦では、「江賦」がほぼ嚆矢となる。

「江賦」はこののち、「川流の歸湊する所、雲霧の蒸液する所。珍怪の化産する所、傀奇の窟宅する所。隱淪の列眞を納め、異人の精魄を挺んず」とこれまでの敍述をまとめ、さらに「若し乃ち岷精は曜きを東井に垂れ、陽侯は形を大波に遯る」と、長江にまつわる傳説上・歴史上のさまざまなエピソードを挙げ、長江を贊嘆して全篇を結ぶ。この最後の一段に、敍述の工夫や新味は見られない。

「江賦」の壓卷はむしろその前の一段、すなわち、船による中心から周縁への移行、その晴れやかな疾走、中心から「擯落」した逸民の「自足」、これらを描き得た部分にある。

郭璞「江賦」は、四字句オノマトペと物盡くしの集積という漢賦の敍法を、極限まで推し進めた壮大な實驗である。それは書き手の壓倒的な小學・博物學の知識を須つて始めて可能になった。だが、漢賦を知識によつて意識的に襲つた敍法は、むしろ人工的に過ぎて痛々しい感すら誘う。枚乗や司馬相如の豪氣はもはやよみがえらず、「江賦」は、唐以前の川や海の賦における、漢賦の敍法を用いた最後の大作となった。

「江賦」で注目されるのはむしろ、『山海經』等に登場する奇怪な生物の列擧、魚と鳥と水草の敍述に垣間見られる清新な情景描寫、さらには當時の道教の教義に借りた新しい仙境の描出である。それまでの川や海の賦が記さなかつた奇怪な物たち、新たな情景、異端の知識への注視は、書き手の價值觀を搖るがす。あるいは、舊い價值から自由な書き手だつたからこそ、それらを注視しえたのか。ともあれ表現と認識の相乗効果により、「江賦」はその掉尾に、

不思議な光景を描き出す。

風いだ水面に命がけで乗り出し、朝霞のような薔薇色のアーチを畫きつつ、支配の痕跡の無い世界へ、自由へと遁走する舟である。その先には「忽として夕べを忘れて宵に歸り、采菱を詠じ以て舷を叩く。自足を一嘔に傲たり、風波を尋ね以て年を窮む」逸民の生活がある。中心を棄てて周縁に向かう、自由への疾走としての隠逸を描き得たのは、現存の川や海を敘した賦では、「江賦」が嚆矢である。

「江賦」の敘法には鬱勃たるエネルギーが存する。掉尾の部分にも、快い疾走感と精氣が漲っている。靜謐と澄明に塗り込められてはいない。六朝的な美學の一環として固定化する直前の、自由への疾走としての隠逸を、からくも描き得た「江賦」は、その意味でも記念碑的な作品であったと思われる。

注

- ① 「江賦」についての專論は少なく、興膳宏「詩人としての郭璞」(『中國文學報』一九、一九六三年)の第三章「江賦」(二三頁～四三頁)、及び廖國棟『魏晉詠物賦研究』(文史哲出版社、一九九〇年)の第四章「魏晉地理類賦篇之分析」三

「詠江河川瀆」(一)「詠長江」(一二四頁～一三〇頁)が管見に入るに止まる。廖論文は「江賦」を押韻によって段落に分け、一段ごとに解説を付す。ただ解説が簡略に過ぎるため、「江賦」のどの點に他と異なる特性があるのか明らかではない。興膳論文は、オノマトペの頻用と怪異性の敘述を中心に考察する。この二點については小論も興膳論文の範圍を出ておらず、そのため、二點に重なる小論第三章「波濤の敘述」と第五章「物盡くし」の「江賦」に即した部分は、原文も含めて敘述を省略した。小論が新たに付け加えた部分があるとするれば、それはおもに第六章以降となる。

② 魏晉六朝に詠物の大賦は多くない。魏晉については前掲廖著四〇〇頁に「就詠物賦而言、千言以上之長篇計有：何晏景福殿賦(一千九百九十餘字)、嵇康琴賦(二千九百餘字)、木華海賦(千餘字)及郭璞江賦(一千六百餘字)四篇」とあり、現存する限りで「江賦」が三番目に位置する。

③ 小論で比較の對象とした、川や海の敘述を含む賦は、以下の二八篇である。出典は原則として、當該テキストの大部分を收録する、より古い時代の選集や類書に求める。ただし漢代の賦で出典が多岐にわたる場合は、輯集と校訂が周到な費振剛・胡雙寶・宗明華輯校『全漢賦』(北京大學出版社、一九九三年)に據る。

- ① 司馬相如「上林賦」(百衲本『史記』卷二一七司馬相如傳)
② 揚雄「蜀都賦」(『全漢賦』一六〇頁)

③班彪「覽海賦」(影宋本『藝文類聚』(中華書局、一九五九年)卷八)

④張衡「西京賦」(尤表本『文選』卷二)

⑤張衡「南都賦」(『文選』卷四)

⑥蔡邕「漢津賦」(『全漢賦』五七一頁)

⑦王粲「游海賦」(『藝文類聚』卷八)

⑧王粲「浮淮賦」(『藝文類聚』卷八)

⑨應瑒「靈河賦」(『藝文類聚』卷八)

⑩曹丕「濟川賦」(『藝文類聚』卷八)

⑪曹丕「滄海賦」(『藝文類聚』卷八)

⑫曹丕「浮淮賦」(『藝文類聚』卷八)

⑬曹丕「臨渦賦」(『藝文類聚』卷八)

⑭應貞「臨丹賦」(『藝文類聚』卷八)

⑮成公綏「大河賦」(『藝文類聚』卷八。四部叢刊本『水經注』河水注卷五、影宋本『初學記』(藝文印書館、一九七六年)卷六、『文選』卷二「郭璞「江賦」李善注で補う)

⑯潘岳「滄海賦」(『藝文類聚』卷八)

⑰左思「蜀都賦」(『文選』卷四)

⑱左思「吳都賦」(『文選』卷五)

⑲木華「海賦」(『文選』卷二)

⑳庾闡「涉江賦」(『藝文類聚』卷八)

㉑庾闡「海賦」(『藝文類聚』卷八)

㉒庾闡「楊都賦」(『藝文類聚』卷六)

㉓曹毗「涉江賦」(『藝文類聚』卷八)

㉔曹毗「觀濤賦」(『藝文類聚』卷九。影宋本『太平御覽』(中華書局、一九六〇年)卷九三八で補う)

㉕孫綽「望海賦」(『藝文類聚』卷八。『初學記』卷三〇、孔廣陶校註本「北堂書鈔」(一九七四年、宏業書局)卷二三八、『文選』卷二〇顏延之「應詔誦曲水詩」李善注、『太平御覽』卷九一八、同卷九三九で補う)

㉖顧愷之「觀濤賦」(『藝文類聚』卷九)

㉗伏滔「望濤賦」(『藝文類聚』卷九)

㉘張融「海賦」(百衲本『南齊書』卷四一「張融傳」)

以上のうち、本文第一章にも記すように、①は歌獵の賦、②④⑤⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔は都城の賦であり、これらに描かれる川は、多くの敘述モチーフの一つに過ぎない。ただ「江賦」には、これらから換骨奪胎したと見られる表現がいくつかあり、比較の意義が認められる。また第二章で觸れるように、これらのうち「文選」や正史所収のものと類書所収のものとは残存の程度が異なる可能性が高い。小論はとりあえず現存の状態で讀みとれる限りのことを記述する。

④ 登源自乎嶓冢、引漾漚而東征。納陽谷之所吐兮、兼漢河之殊名。總畎澮之群液、演西土之陰精。遇萬山以左迴兮、旋襄陽而南榮。切大別之東山兮、與江湖乎通靈。

⑤ 前掲興膳論文三七頁に「さらに細かい部分に目を注ぐと、郭璞は音に關してはもちろんのこと、その上、水の擬音に

はすべて水の部の字を、岩石の形容にはすべて石の部の字をあてるといふ驚くべき徹底ぶりを示している。形の異なつた水の部の字が八句三十二字、後には七句二十八字息もつかせずたたみかけるように連なつて水勢をあらわす壯觀さに、當時の讀者は讀嘆を惜しまなかつただろう、前掲廖著一二五頁に「聯邊瑋詞之多、比之漢賦毫無遜色」とある。

⑥ 「或○○○○、或○○○○」という構文もあり、四字句に含めた。

⑦ 前掲興膳論文三九頁も「羅列された動物の豊富なこと、奇怪なことにかけては、司馬相如も左思も彼に遠く及ばないのである」と記す。

⑧ 前掲廖著四一九頁にも「魏晉詠物賦一則短賦盛行、鋪張揚厲・繁類成艷之長篇甚少、一則詠物賦既以一物爲吟詠之對象、其所着力者集中於該物物象之刻畫・物德之吟詠以及因物而生之情志、故名詞事類堆砌之現象較少」とあるが、「仍有少數詠物賦有此遺習」として「何晏景福殿賦」「成公綏天地賦」「木華海賦」「郭璞江賦」「嵇康琴賦」「潘岳笙賦」を挙げ、「海賦」も「魏晉詠物賦」の例外に加える。

⑨ 前掲廖著一二七頁に「『集若霞布、散如雲韶』二句以『霞布』『雲韶』優美之意象形容群鳥之集散、頗能產生顏色及動態之美感」とある。

⑩ 同じ書き手の「鹽池賦」（『藝文類聚』卷九）、「蜜蜂賦」（同卷九七）、及び『山海經圖贊』（『正統道藏』太玄部『山

海經』所收）にも、光とその動きに着目した描寫が多い。